

# 鈴川小学校 見守り活動マニュアル

## 〈家庭編〉



鈴川小学校父母と教師の会

# はじめに

鈴川小学校父母と教師の会では、毎月5日ごとの「学年見守りの日」の制定や「鈴っ子見守り通信」の定期発行など見守り活動を推進しております。

しかし、子どもの安全・安心を確保するためには、家庭と小学校の連携強化はもちろんですが、地域との協働が重要と言われております。

地域の皆様と一緒に活動を展開していくにあたり、これまで鈴川小学校父母と教師の会で発行している“鈴っ子見守り通信で”連載してきた内容の中で、活動に際しての心構えや注意していただきたい点、いざというときの対処方法についてとりまとめたマニュアルを作成してまいりました。

それに加え、今回は見守り活動の中核となる家庭における活動や備えについて、これまで「鈴っ子見守り通信」で発信してきた内容をもとに、再編集し本マニュアルを作成することとなりました。

ぜひ、このマニュアルを参考にいただき、親子で話し合う機会を作ってください、家庭毎の「安全のめあて」を決めるなど、家庭単位での活動が根付くことを願っております。

平成26年●月



# 目次

◆◆◆ 親の気持ち ◆◆◆ .....	- 4 -
◆ 「新1年生お母さん」は、こんな気持ちでいます！.....	- 4 -
◆◆◆ しつけから始まる ◆◆◆ .....	- 5 -
◆ 「見守り活動」は「しつけ」からスタートします.....	- 5 -
◆ 危険に対する経験値を上げる工夫をしよう .....	- 6 -
◆ 「安全めあて」を決めよう！ .....	- 6 -
◆◆◆ 子どもの特性を知る ◆◆◆ .....	- 7 -
◆ 男の子の3人に一人は道路を走って渡っている.....	- 7 -
◆ 「きちんと止まろう、ゆっくり歩こう」 .....	- 7 -
◆ 子どもは大人のマネをして交通ルールを身につける.....	- 7 -
◆ 子どもは「何が危険かわからない」 .....	- 8 -
◆ 予測がつかない子どもの行動 .....	- 9 -
◆ まわりに影響されて「見てしまう子ども」 .....	- 9 -
◆ 子どもの目 <sup>目</sup> は大人とは見え方が違う .....	- 10 -
◆◆◆ 交通安全対策 ◆◆◆ .....	- 11 -
◆ 貴方は子どもが横断するのを邪魔していませんか？.....	- 11 -
◆ 子どもが手を挙げる理由 .....	- 11 -
◆ 春に注意してほしいこと .....	- 12 -
◆ 秋に注意してほしいこと .....	- 13 -
◆ 冬に注意してほしいこと .....	- 14 -
◆◆◆ 自転車対策 ◆◆◆ .....	- 15 -

◆	自転車による交通事故の実態 .....	- 15 -
◆	自転車事故では頭部のケガが多い .....	- 15 -
◆	ヘルメットを選ぶ際のポイント .....	- 16 -
◆	ヘルメットの選び方 .....	- 16 -
◆	自転車の選び方 .....	- 17 -
◆	自転車も「車のなかま」です .....	- 17 -
◆	自転車に乗る時の服装 .....	- 18 -
◆	自転車は原則、車道走行 .....	- 18 -
◆	危険な乗り方は止めましょう .....	- 18 -
◆◇◆	<b>不審者対策</b> ◆◇◆ .....	- 19 -
◆	不審者とは何か? .....	- 19 -
◆	「不審者」の意味 .....	- 19 -
◆	意識して見ること .....	- 20 -
◆	「不審者」を見抜くために .....	- 20 -
◆	子どもが被害に遭うときの特徴 .....	- 21 -
◆	安全の約束「いかのおすし」 .....	- 22 -
◆	下校中の道草や帰宅後の外出時の注意点 .....	- 26 -
◆	“あいさつ”で繋ぐ地域の力 .....	- 27 -
◆◇◆	<b>安全マップ</b> ◆◇◆ .....	- 29 -
◆	安全マップ（北部版） .....	- 29 -
◆	安全マップ（南部版） .....	- 30 -

## ◆ ◆ ◆ 親の気持ち ◆ ◆ ◆

### ◆ 「新1年生お母さん」は、こんな気持ちでいます！

ある出版社が、小学校入学を迎える子どものお母さんを対象に、子どもの防犯についての意識をインターネット調査しました。この調査で、「新1年生お母さん」の97.4%が、「子どもの“安全・防犯”」について不安を抱えていることがわかりました。具体的には、

- ✓ 交通事故に遭うこと・・・94.8%
- ✓ 犯罪や事件に巻き込まれること・・・94.0%
- ✓ 登下校時の安全・・・89.2%

についてお母さんは不安を抱えているようです。さらに、子どもの安全面に関する情報を「もっと知りたい（情報が足りない）」と思うお母さんは80.4%いました。子どもの防犯に対して不安を抱える一方で、防犯に関する情報が不足しているという問題意識を持っている傾向が明らかになりました。また、警察、自治体、地域社会に期待する“安全、防犯”への対応について尋ねると、

- ✓ 通学路の危険箇所などの子どもへの指導・・・51.6%
- ✓ 通学路や遊び場所などの巡回・・・51.2%
- ✓ 不審者情報などを知らせてくれるシステム・・・44.4%

がランクインするなど、お母さんが子どもの通学路での危険を特に不安に思い、子どもの危険についての情報提供を期待していることがわかりました。

## ◆ ◆ ◆ しつけから始まる ◆ ◆ ◆

### ◆ 「見守り活動」は「しつけ」からスタートします

見守り活動は、パトロールなどの特別な活動ばかりではありません。

まずは、交通事故や不審者から身を守るためには、子どもたち自身が「自分で自分の身を守る」方法を身につけなければなりません。

保護者の方や学校の先生、見守りボランティアの方がいくら活動していても、24時間そばにいて守ることはできません。一人でいるときにも交通事故に遭わないようにしたり、万が一、不審者と遭遇したときにいかに対応するかが重要になってきます。

そのためには、まず親が手本を示さなければなりません。

例えば、子どもに「赤信号で渡ってはいけない」と注意していても、親自身が信号無視をしていては何の説得力もありません。

子どもたちの「安全」や「常識」の判断基準は、日頃の親の行動が基準となります。つまりは、「自分の子どもがきちんとあいさつができない」としたら、親があいさつをしていないためにできていない可能性が高いのです。

子どもにばかり「安全」を要求しても、親が「安全」に対していい加減なことではまったく説得力もなければ、効果も期待できません。

外出時には、周囲に気を配って、車やバイク、人物などに注意することを親が示して「歩き方、周囲への注意の仕方」を教えられるように、親の防犯対策を子どもが手本とできるように、親がまずしっかり身につけていきたいものです。

子どもたちを取り巻く環境には、「絶対に安全」ということはありません。この果てしない課題にどう向き合い取り組むか、そして、子ども自身が万が一の時に自分の身を守る行動がとれるよう訓練し、その方法を身につけさせていく工夫が大切になってきます。そして、そのためには日頃から子どもと話し合うことも大切になってきます。

決して難しいことではありません。「しつけ」を頑張ることが、見守り活動のスタートになります。

## ◆ 危険に対する経験値を上げる工夫をしよう

昔、通学路の安全対策についてアンケートをとったことがあり、その回答の一部に「子どもが安全対策を学べば良い」という回答がありました。一見するといかにも正しい意見のようですが、それは“大きな勘違いをしていないか”と考えます。

子どもは“正しい”“悪い”、“安全”“危険”などの価値判断を、経験で学ぶことにより形成していきます。大人に比べ経験値が低いため、その判断基準も曖昧になりますし、日常の家庭でのしつけの度合いにより、その能力差は大きくなっていきます。

危ないことをしていても「子どもだから仕方ない」ではなく、危ない理由やどうすればいいのか、タイミング良く叱ることが、危険に対する経験値を上げていく近道になっていきます。

## ◆ 「安全めあて」を決めよう！

子どもが主体的に取り組めるように「安全めあて」を決めて、きちんと実践できたらしっかり誉めてあげましょう。

＜安全めあての一例を挙げてみます＞

- ◇ 道路を渡るときは、必ず左右の確認
- ◇ 道路では走らない
- ◇ 寄り道はしない
- ◇ 公園などで暗くなるまで一人で遊ばない
- ◇ 知っている人に会ったらあいさつをする

## ◆◇◆ 子どもの特性を知る ◆◇◆

### ◆ 男の子の3人に一人は道路を走って渡っている

歓声を上げながら、全速力で道路を走り抜ける子どもの姿をよく見かけます。とくに男の子は「スピード」が大好きで、5歳から8歳の男の子の3人に1人は、道路を走って渡っているというデータもあります。



小さな子どもたちは、車に興味津々です。バスやトラックがやってくると、手を振りながら近づいていってしまうこともあります。

車は急に停まれないこと、死角があることを知らないばかりか、自分を守ってくれると思いきこむこともあります。

子どもは、「知識」と「行動」を結びつける能力も未発達です。だから「飛び出しはだめ」と教えられて「わかった」と答えていても、その通り行動できません。道路の向こう側に友だちがいたり、遊びなど楽しいことが待っている時は、欲求を抑えることができないのです。親が道路の向こう側で「危ない！」と注意した時でさえ、子どもは飛び出してしまふことがあります。

### ◆ 「きちんと止まろう、ゆっくり歩こう」

いつも走り回っている子どもたちには、「ゆっくり歩く」「きちんと止まる」ことを教えましょう。

右側を歩く。歩道があれば歩道を歩く。横断歩道では左右を確認する。縁石、公園の出口、玄関先、「止まれ」のマーク、踏切、お店の出口などでは「止まる」ことを繰り返して教えるようにします。

実際の道路に出て、ゆっくり歩きながらひとつずつ確認するのがポイントです。家の近くの「止まれ」マークを探し、実際に見ながら学ぶのもいいでしょう。



### ◆ 子どもは大人のマネをして交通ルールを身につける

子どもの交通事故原因の半数以上は飛び出しです。

(財) 交通事故総合分析センターのデータによると、6歳以下の幼児



歩行者の違反別・年齢層別交通事故件数に占める飛び出しの割合は52.8%、小学生歩行者（7～12歳）では49.6%（平成13年度）。全歩行者の飛び出しが29.6%と比べると、いかに多いかがわかります。

しかし、信号無視の割合を見ると、全歩行者では20.3%を占めるのに対して、幼児や歩行者では7.8%、小学生歩行者では9.4%と少なくなっています。

むしろ、平気で信号無視しているのは大人のほうです。子どもの信号無視や横断歩道外横断などの違反行為は、大人と一緒にいる時に多くなるという調査もあります。



オトナのまねをして信号無視しようかな?!

子どもたちは、どこで大人の行動を見ているかわかりません。子どもが未熟な判断で大人と同じ行動をした場合、どんなことになるでしょうか。

大人として交通ルールを守ることは、子どもたちの見本になるのです。

模倣（他人のまね）は、子どもの特性の一つです。子どもは、善悪の区別なく大人のまねをします。特に母親や父親は日常的に幼児に何らかの影響を与えます。大人が模範となるべき行動を心がけることが必要です。

子どもは大人のマネをしながら交通行動を身につけていくのです。

## ◆ 子どもは「何が危険かわからない」

交差点で近づいてくる車、横断歩道付近の駐車車両、駐車場でバックしてくる車など、危険な対象を見つけだす能力を子どもも持っています。この能力は成長と経験と共に向上していきます。

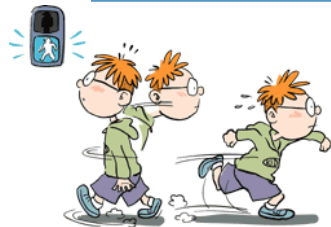
ある研究から、小学1年生では「何が危険かわかっていない」子どもが多いことがわかっています。しかし、学年が上がるにつれて、危険に対する理解能力は高まります。

例えば、横断歩道を渡っている時、高学年の子どもは「左折してくる車が危ない」と答えたのに対し、低学年の子どもは「赤信号で停まっている車が怖い」と答えました。状況に応じた判断というより、近いもの、大きいものを「怖い」と判断します。

危険予測の力は、成長段階に応じて変化していきます。発達段階、個人差によって危険予測の能力が違うことを理解してあげてください。

## ◆ 予測がつかない子どもの行動

横断歩道を渡っている途中で、歩行者用青信号が点滅を始めたらどうしますか？



「急いで渡り切れればいいじゃないか。」と思うのは大人の考えです。子どもは点滅が始まると、どうしたらいいかわからなくなり、慌てて引き返してしまうことも多いのです。

また、同時に2つのことに注意することも苦手です。信号を気にしながら、横断歩道を横切る右折車、左折車に注意を払うのも難しいのです。

大人の歩行者と同じだろうと考えてドライバーが車を近づけると、びっくりして引き返したり、急に駆け出したりする場合があります。

子どもは、走ってくる車と自分の位置関係や距離などを判断する能力が、まだ未発達だからなのです。道路を渡ろうとしている子どもを見たら、ドライバーの方は「予測できない行動をとるかもしれない」と気を引き締めてください。

## ◆ まわりに影響されて「見てしまう子ども」

子どもは信号をきちんと見ていません。子どもの「見る」こと、安全確認行動は、その時の楽しい、悲しい、驚き、不満と言った心の動きに強く支配されています。



また、大人と出かけた時の子どもは、大人にすっかり頼りきってしまいます。さらに、友だち数人と一緒に行動すると、とたんに警戒心が乏しくなります。

まわりに影響されやすく、お母さんの声、友だち、近くにいる犬等、その時の興味のあるものに目がいてしまい、信号をきちんと見ていないことが多いのです。

子どもはあっという間に成長します。でも、体格は大人並みになっても、状況判断力や危険回避能力も大人並みというわけにはいきません。

個人差もあり、高学年になっても交通状況への理解度があまり上がらない子どももいます。

## ◆ 子どもの目は大人とは見え方が違う

大人になってから、自分が通っていた小学校に行ったことはありませんか？

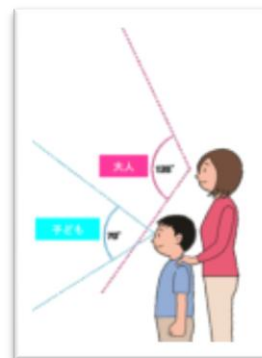
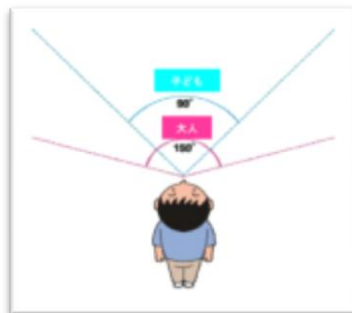
大人になって見るその光景は、小学生時代より小さく見えます。

もちろん身体が小さかったため、大きく見えたということもあるのですが、実は「見える範囲」、つまり視野が違うことによる影響があるそうです。

子どもの水平視野は平均90度で、大人は平均150度まで見え子どもの約1.5倍の視野があるそうです。また、垂直視野だと、子どもが平均70度で大人は平均120度まで見え、こちらも1.7倍の視野があるということです。つまり、大人が考えているほど子どもの視野は広くなく、身長差も加味すると子どもは大人の視野の半分程度しか見えていないことになるかもしれません。

ということは、子どもがいくら注意深く見ても、大人より実は見えていないことが多いということになります。

そうすると、子どもに注意する場合は、見えていないことを考え合わせて、きめ細かい注意をしてあげなければなりません。



## ◆◆◆ 交通安全対策 ◆◆◆

### ◆ 貴方は子どもが横断するのを邪魔していませんか？

信号機のない横断歩道で、歩行者が「右、左」と大きな動作で確認をしているのに、行き交うクルマは止まってくれない。歩行者としての自分が「なかなか渡れない」と困ったり、車とぶつかりそうになって、ヒヤッとしたりした経験は誰にでもあるのではないのでしょうか。



では、ドライバーのあなたはどのようにしていますか？

横断歩道を渡ろうとしている人がいたら止まって、「どうぞ」と譲っていますか。それとも「自分が止まらなくても、いつかは渡れるだろう」と通過してしまいませんか？

もし后者だったら…それは立派に交通違反です。道路交通法第 38 条第 1 項で「信号のない横断歩道で、横断している歩行者や横断しようとしている歩行者がいる場合、ドライバーはその手前で一時停止をして歩行者に道を譲らなければならない。」と規定しています。

人対車の事故の多くは、道路横断中に起こっています。ドライバーが歩行者を思いやる気持ちを持てば、事故を減らすことができるのです。

### ◆ 子どもが手を挙げる理由

幼稚園や小学校で、子どもたちは「手をあげて、右を見て左を見て、また右を見て横断歩道を渡りましょう」と教わっています。でも、なかには横断歩道に立ち、渡れないで困ったような顔をして、きょろきょろしているだけの子もいます。



教わったことを実行するのは簡単なことではありませんし、手をあげれば車は止まってくれと教わったのに、実際は止まってくれなかったら…。

子どもたちには、なぜ手をあげるかを教えてあげましょう。ドライバーから身長の高い子どもは見えにくいこと。車が左側通行をする日本で

は慣習として右手よりも左手をあげて渡る方が、子どもの目から近づいてくる車など周囲の交通環境の変化に気づきやすいことがあります。

一生懸命に手をあげている子どもを見たら、温かい気持ちで道を譲ってほしいのです。

## ◆ 春に注意してほしいこと

平成25年中に小学生が当事者になった交通事故は、右グラフのとおり4月に一旦減少したあと、5月以降に増加しはじめて7月に40件で最多となる特徴があります。

4月頃はまだ緊張感があるためか子どもたちも注意していますが、慣れてくると活動的になるためかと思われる。

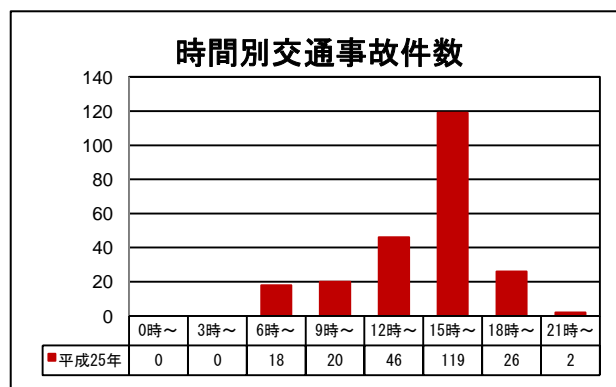
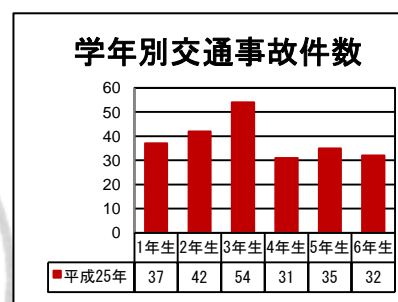
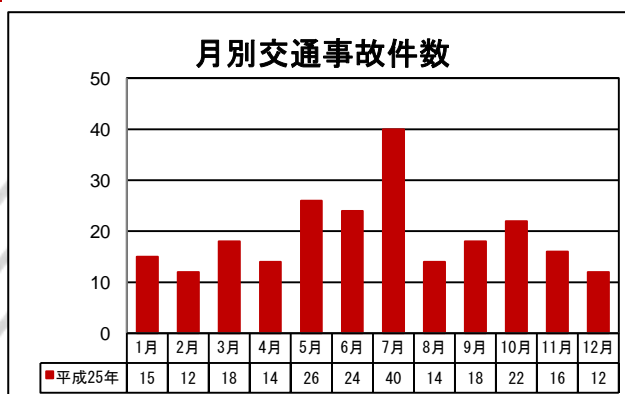
また、学年別件数のグラフでは全体的に低学年が多く、特に1・2年生より3年生の方が交通事故に遭う割合が多くなっています。

登下校時は、次のことに注意しましょう。

### <注意するポイント>

- ・ ふざけて走ったり、道路に飛び出さない
- ・ 登下校は1列になって歩く
- ・ 道路を横断するときは、必ず左右の安全を確認する
- ・ 左右を確かめるときは、道路の一步前で止まって確かめる
- ・ 歩道や路側帯、歩行者用のゾーンの中を歩く

また、時間別発生件数のグラフでは、下校後の午後3時から午後6時までが全体の51.5%を占める119件で特に多くなっています。最近では自転車に関連する交通事故の増加が問題になり、道路交通法が改正され自転車対策が強化されて



います。子どもが自転車で出かけるときは、次のことに注意しましょう。

### ＜注意するポイント＞

- ◇ 自転車に乗るときは、ヘルメットを被る
- ◇ 道路を横断する時は、降りて自転車を押して渡る
- ◇ 自転車で歩道を走るときは、歩行者に注意して車道側を乗る
- ◇ 交差点を曲がる時は、スピードを落とし車道にはみ出さないように注意する
- ◇ 道路で遊ばない

## ◆ 秋に注意してほしいこと

夕暮れ時間が早まってくると、道路を横断中の歩行者が被害に遭う交通事故が多く発生します。

この時期になると、色が濃い目の服装だと目立ちにくくなり、ドライバーからも発見しにくくなります。歩行者からすれば、「車が止まってくれるだろう。」という気持ちで道路を横断すると、実際には見えていないために、交通事故に遭う危険度が高まることとなります。

これまでも、山寺街道や医者街通りから国道13号に抜ける道路で、横断歩道を横断中の子どもが何回か交通事故に遭っています。

一年のうちで交通事故の発生件数は、秋から年末にかけて多くなる傾向があります。統計によると最も交通事故が多かったのは12月で、2位は10月、3位は11月と、年の後半に集中しています。これからの時期は、交通事故に本当に注意しなくてはならないといえます。

これは、日没が早まることが原因と考えられ、それは人間の目は明るさの変化に弱いので、まだ日が陰りはじめたばかりの時間というのは、見えているつもりでも目はその明度にまだ慣れていないからなのだそうです。

つまり、【よく見えていないことに気付いていない→油断する→事故が起きる】というわけです。

秋から冬にかけて、子どもたちの帰宅時間に当たる午後4時～5時ごろは、まだ明るさが残っていたとしても、ドライバーからは歩行者がよく見えないのだと、話して聞かせてあげてください。

夕方は距離感もつかみにくくなるので、歩行者である子ども自身も判断を誤りやすくなっています。

秋の夕暮れ時は、次の点について親子で話し合い注意しましょう。

### <子どもが注意すること>

- ◇ なるべく暗くなる前には帰宅する
- ◇ 車の後ろや物陰からは道路を横断しない
- ◇ リフレクターを掲げる、ズックや帽子に反射テープを貼るなど反射材を活用し、ドライバーに自分の存在を知らせる
- ◇ 自転車に乗るときは、暗くなるまえにライトを点けて乗る



### <大人（ドライバー）が注意すること>

- ◇ 帰宅時間を確認してから、自宅から出かせせる
- ◇ 帰宅時間が遅くなる場合で、時間に余裕があるときは迎えに行く
- ◇ ヘッドライトの早め点灯を心がける
- ◇ 子どもの姿を見かけたら、車のスピードを減速する

## ◆ 冬に注意してほしいこと

冬になると、歩道のない通学路では道幅も狭くなり、子どもたちが歩いていると車同士がすれ違うこともままならない状態になります。また、雪のために視界が悪い日もあります。



通学路の除雪ばかりでは、子どもたちの安全は確保できません。当然ながら、子どもたちの交通マナーもしっかりとさせる必要があります。

冬は、次の点に注意が必要です。

### <注意するポイント>

- ◇ 雪のため道幅が狭いので、登校班は1列になって歩く
- ◇ 滑りやすいので、ポケットに手を入れたまま歩いたりしない
- ◇ 雪玉を作って投げたり、氷の固まりを蹴ったりしながら歩かない
- ◇ ふざけあって車道にはみ出さない
- ◇ 凍結している道路を滑りながら歩かない



## ◆◆◆ 自転車対策 ◆◆◆

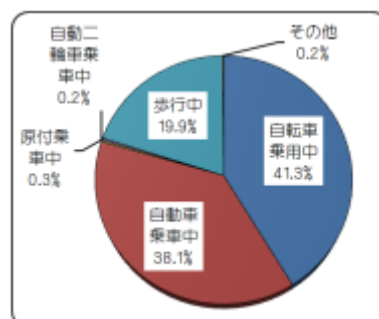
### ◆ 自転車による交通事故の実態

皆さんは「子供が自転車に乗るときはヘルメットを被るよう教えなければならぬ」ということを知っていましたか？

平成20年6月に道路交通法が、『児童(6歳以上13歳未満)や幼児(6歳未満)が運転する場合、その保護者は乗車用ヘルメットをかぶらせるように努めなければなりません。』と改正されています。

いわゆる努力義務といわれるものですが、子供が関連する交通事故で頭部をケガする割合が高いことの裏返しと考えることができます。

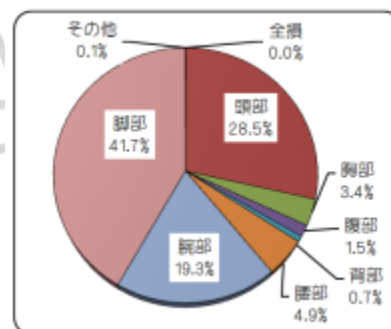
過去の統計の数字を見てみると、全国でケガをした交通事故の形態では、15歳未満は自転車によるものが41.3%を占めていて、自動車に乗っていて交通事故でケガをするよりも多くなっています。



また、アメリカの自転車事故の調査では、自転車事故の3分の1が頭部障害事故であり、死亡、重傷者の85%はヘルメットがあれば助かったと分析されています。

### ◆ 自転車事故では頭部のケガが多い

全国で自転車に乗っていて交通事故で死亡したケースでは、脚部41.7%で一番多く、二番目に頭部28.5%と全体の3割近くを占めています。これは子供が大人に比べて頭が重く、頭から転倒してケガをしやすい傾向があると考えられるためです。



手足に比べ、頭部にケガをしてしまうと最悪の場合、亡くなってしまったり、重い後遺症が残ってしまったりする可能性が高まります。頭部を守ってくれるヘルメットは必需品です。



## ◆ ヘルメットを選ぶ際のポイント

バイクに乗っている大人の方で、あごひもを締めていなかったり、緩んだまま運転している光景を見かけることがあります。せっかくヘルメットを被っていても、交通事故にあったときにヘルメットが外れてしまうような被り方では意味がありません。ケガを防ぐためには、頭のサイズに合った物を選び、しっかりと正しい状態で装着することが大切です。

決して高価な物を準備する必要はないので、値段は2～3千円台でも大丈夫です。できれば「自転車用ヘルメット」としての安全基準を満たした「SGマーク」(右のマーク) が付いている子供用の自転車用ヘルメットを購入することをお勧めします。



自転車店だけでなく、スポーツ店やデパートなどの自転車コーナーでも、年代別にとってもカラフルなデザインのヘルメットが並んでいます。

## ◆ ヘルメットの選び方

まず、年齢、サイズ、デザインを目安にヘルメットを選び、実際に被ってみます。サイズが小さくて頭から浮き上がった状態だったり、前後に動いたりする物はよくありません。



頭のサイズに合った物を選びましょう。

### ➤ サイズ調整機能

ヘルメットの内側にアジャスターバンドが付いている場合は、緩めてから正しい角度で被り、ヘルメットを押さえながら子供が痛がらない程度に締めていきます。前後や左右にヘルメットを動かしてみ、緩くて動かないか確認します。



しっかり固定できる程度までバンドで調整します。

### ➤ サイズ調整パッドの使用方法

ヘルメットの種類によっては、アジャスタバンドがないタイプもあります。

ヘルメットの内側に少し隙間があったり、ぐらついたりするときは、ヘルメットの内装パッドをめく



り、緩みの気になる場所にサイズ調整パッドを貼って微調整を行います。

#### ➤ あごひもの調整

ヘルメットを正しい位置で被り、ワンタッチバックルを締めてみます。被ってみて合わないときは、あごひもの長さを調整し、再度被ってサイズを合わせます。



あごとあごひもの間に指1本が入る程度で、下を向いたときに苦しくならないよう調整します。

## ◆ 自転車の選び方

#### ➤ 自転車の選び方

サドルにまたがったとき、両足のつま先が地面につき、両肘が軽く曲がる程度のサイズを選びましょう。

#### ➤ 自転車の点検

- ◇ ブレーキは前後ともよくききますか。
- ◇ ベルはよく鳴りますか。
- ◇ タイヤの空気はきちんと入っていますか。
- ◇ ライトは明るく点きますか。
- ◇ 反射材はついていますか。

## ◆ 自転車も「車のなかま」です

自転車に関連する交通事故は、交通事故発生件数の約2割を占めているそうです。また、自転車は「車のなかま」なので、原則として車道を走らなければなりません。

自転車に乗るときは、「自転車安全利用五則」やルールを守って安全運転を心がけましょう。

### <<自転車安全利用五則>>

- ① 自転車は、車道が原則、歩道は例外
- ② 車道は左側を通行
- ③ 歩道は歩行者優先で、車道寄りを徐行

- ④ 安全ルールを守る
- ⑤ 子どもはヘルメットを着用

### ◆ 自転車に乗る時の服装

転倒したときにケガをしないように、長袖・長ズボンと靴は滑りにくい運動靴が適しています。タイヤやチェーンに巻き込まれないようなスカートやズボンを選び、滑りやすいサンダルは控えましょう。

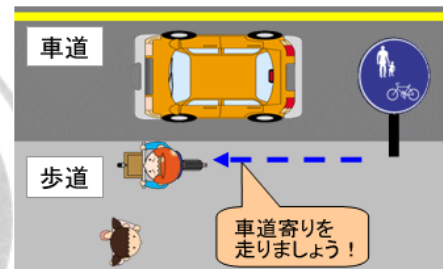
### ◆ 自転車は原則、車道走行

自転車も車両なので、車道を走行しなければなりません。が、13歳未満に限っては歩道を走行することも認められています。また、車道を走行するときは、左側を走行します。



➤ 歩道は歩行者優先で自転車は車道寄りを徐行

歩道ではすぐに停止できるスピードで走行し、歩行者の通行を妨害する場合は一時停止しなければなりません。



### ◆ 危険な乗り方は止めましょう

ルールやマナーを守らないと、ケガをしてしまいます。二人乗りや、傘差し運転、2列走行、飛び出しなど、危険な乗り方を見かけたら注意しましょう。



## ◆◆◆ 不審者対策 ◆◆◆

### ◆ 不審者とは何か？

事件後に、発生現場近くの住人などが「近くで不審者を見た」とか、「不審な車を目撃した」と報道されることが多くあります。目撃者はなぜ、不審に思ったのでしょうか？



警察官が見て「挙動不審」という場合、「挙動」とは、「立ち居振る舞い。動作」のことで、これが怪しい者ということ、「職務質問」をしたくなるような人物ということになります。警察官と目が合ったら、慌てたり怯えたり、方向転換をして逃げるなどの分かりやすい反応を示すといえます。

そもそも、「不審者」とはどういうものを指すのでしょうか。大人なら「不審者」という文字から、なんとなく様子がおかしい人だろうという感覚は持てるでしょうが、子どもに「不審者に気をつけなさい」と言って、実際に伝わるのでしょうか。子どもは大人よりもさらに漠然としたイメージしか持てないとしたら、はっきりと分からないものに対して、一体どうやって警戒することができるのでしょうか？

### ◆ 「不審者」の意味

辞書で「不審」という言葉を引くと、「はっきりしない点があって、疑わしく思うこと。いぶかしく思うこと。疑わしく思えること。また、そのさま」とあります。

では一体、「何が」おかしいのか。「様子がおかしい」と思う以前に、「その場所にいることがおかしい、不思議である、不自然だ。」ということになります。

例えば、「小学校のそばで、普通なら学校や会社に行っているはずの年代の人が、学校の方を見て、ずっと車のそばで立っていた」としたら、これは怪しいということになります。「その場所にいることがおかしい。不自然だ。不思議だ。なぜ、そんなところにいるのだろうか？」という疑問が起こることが、「不審者」を認知する第一歩になります。人の行動範囲の中で、その人物がいることが“常態ではない”ということ、“いつ

もはいないのにいる”ということです。

となれば、“常態”をしっかりと把握していなければならなくなりま  
す。さらに、「いつもと違う状況」に対して敏感でなければ、違いが分か  
りません。見ても何も考えていなければ、おかしいと思うこともなく、  
見過ごしてしまうことになってしまいます。



## ◆ 意識して見ること

かつて「泥棒」といえば、頬かむりをして唐草模様の風呂敷包みを背  
負って、ついでに口の周りに髭があるような、見るからに泥棒というイ  
メージがありました。

しかし、そんなコテコテな泥棒などはいるはずがありません。捕まら  
ないように、目立たないように、ごく当たり前のセールスマンのように  
背広にネクタイ姿であったりします。「不審者」も、一目で見ておかしい  
と思えるような分かりやすい格好でいるわけではないでしょう。額や背  
中に「不審者」と書いてあるわけもないし、ごく一般的な見た目であり  
ながら、「おかしい」と思わせるたたずまいや行動があるわけです。

人が「不審者」を見つけるには、「意識して見る」ことが大切だといえ  
るでしょう。

## ◆ 「不審者」を見抜くために

動作としては、「普通でない行動」ということがいえます。特に、「人  
目を避ける」行動で、当たり前の日常では、人とすれ違っても相手のこ  
とはあくまでも「ただの通りすがりの人」として、互いに気にしないも  
のです。

しかし、「不審者」と思われるには、「何かが違う」と思わせるものが  
あるはずで、普段、人がいないような場所に隠れるように立っていたり、  
人が通ると顔をそむけたり、顔を隠すような様子をとることです。

物陰に立っていれば、それだけで「おや？」と思うはずで、仮に目  
が合ったとき、不安そうな、あるいは困った表情をしたり、目がキョロ  
キョロとしたらおかしいでしょう。

不審者の目撃者は、異変や異状に敏感でなくてはなりません。つまり、

「いつもと違う」ことに気がつかなければなりません。

「いつも」の状態がどうであるか意識していなければ、毎日通る、いつもの道だからと何も考えずに歩いていては、目に入る情報にも意識が回りません。日頃から周囲をよく見て、何か変わったことはないだろうかと注意して歩くことが大切です。

普段、同じ場所において、同じように行動していても、ある事実に気づく人と、気づかない人がいるので、その人の周囲への関心度が違うということが分かります。

ぼんやりしていたり、考え事に集中していると状況が見えなくなるので、せめて通学路や子どもが遊ぶ公園などだけでも、これまで以上の関心を持って見るようにするといいいでしょう。



## ◆ 子どもが被害に遭うときの特徴

### ➤ 一人でいるとき

犯罪者は一人でいる子どもをターゲットにしやすく、一人でいるときに犯罪に巻き込まれると、発覚が遅れることがあります。複数であれば、一緒にいた子が周囲の大人に知らせることができ、早めの救助につながります。下校時や通塾時、遊んでいる最中など、子どもが一人になる時間を減らすようにしましょう。

### ➤ 言葉巧みな誘いについていってしまう

見た目がきちんとしていている人に、気を許してしまうような言葉をかけられると、つい誘いにのってしまいます。“知らない人”の定義を再確認し、また犯罪者の手口を理解して、誘いにのらないようにしましょう。

### ➤ 子どもを誘う手口はいくつもあります！

「言葉巧みな誘い」とはいったいどんなものなのでしょう。過去に起きた子どもの連れ去り事件などを参考にまとめてみました。

主に以下のような4つのパターンに分類できます。

#### <子どもが関心のあるもので誘惑する>

「あっちにドングリがたくさん落ちてるところがあるよ。行ってみる？」

「新しいゲームのモニターを探してるんだ。やってみて感想を聞かせてくれる？」

「あっちでアンケートに答えると、500円もらえるよ！」

### <子どもに助けを求める>

「この辺にケータイが落ちてなかった？お礼をするから探してくれる？」

「ネコが逃げちゃったから、探すのを手伝って！」

「具合が悪くて困ってるんだ。病院の場所を教えてくれる？」

### <緊急事態を装う>

「お母さんが交通事故にあったんだ！急いで病院に行こう」

「お父さんから〇〇ちゃんを連れてきてって頼まれたよ。すぐ車に乗って！」

「さっきから変な人がついてきているよ。危ないからあっちに隠れよう！」

### <大人の世界に誘惑する>

「かわいいね。雑誌のモデルを探してるんだけど、写真を撮らせてくれる？」

## ◆ 安全の約束「いかのおすし」

子どもたちが不審者に遭遇したときにどう対処すればいいかを、簡潔なポイントに絞って標語にしたものが「いかのおすし」です。

**い | か | の | お | す | し**

**<危ない目にあわないためのやくそく>**

ついて**い**か**な**い(知らない人についていかない)

**の**らない(知らない人の車に乗らない)

**お**おごえをだす(あぶないときは大声でさけぶ)

**す**ぐにげる(人のいる安全なところに逃げる)

**し**らせる(家族や学校にしらせる)

しかし、安全の約束を知っていれば、子どもの安全が確保されるわけではありません。この「いかのおすし」を覚えさせることのほかに、実

際に不審者と遭遇した時に子どもがどうすればいいかを、しっかりと教えておかなければなりません。

## その1：ついて**わか**ない（知らない人についていかない）

### ➤ 「知らない人」とはどんな人？

「知らない人についていかないなんて、当たり前のことだろう。子どもだって分かる」と、思っていないですか？子どもにとって「知らない人」という基準が、大人とは違います。大人であれば近所の人だったり、仕事等で付き合いがあれば、「あの人は誰誰さん」と明確に認識することができます。

しかし、子どもの場合は、大人と違って交友関係が曖昧で、“知っている人”の範囲は「顔を見たことがある」程度です。そうすると、相手から「▲▲くん」と名前と呼ばれると、「僕の名前を知っているから、知っている人かな？」と考えます。

「知らない人」と言うのは簡単ですが、子どもにとっては判断が難しいのかもしれませんが、ある程度の判断基準を、日頃から教えてあげる必要があります。

例えば、こんな基準はどうでしょうか。

高 安全性 低	安全度Ⅰ・・・いつも顔を合わせる近所の人、見守り隊ボランティアの人、黄色い腕章を付けている大人
	安全度Ⅱ・・・通学路沿いに住んでいる人、親しくはしていないが同じ地区に住んでいて顔がわかる大人
	要警戒・・・車の窓越しに声をかけてくる大人、顔を知らないのに「お菓子などをくれる」と近づいてくる大人、一人でいて子どもの方をずっと見ている大人

### ➤ 不審者は名前を調べるのは難しくない

登下校中であれば、子どもたちはネームプレートをつけています。

知らない子どもでも、名前を確認することはできます。

ネームプレートをつけていなくても、自転車に乗っていれば泥よけに名前が書かれているでしょう。自宅から出てくるところから見ていると、表札などから名字や名前を確認することができます。



➤ **もし、道を尋ねられた時はどうすればいいの？**

顔を見たことがない大人から、もし道を尋ねられたら、どうすればいいでしょう。

答えは「僕（私）は分からないので、大人の人に聞いて下さい。」  
です。それでもしつこく尋ねてくるようであれば、不審者と考えてその場からすぐ逃げるように教えましょう。

本当に困っている人は、子どもに道を尋ねたりしないはずですし、最近ではカーナビのついている車も多くなっているため、子どもに道を聞くこと自体が不自然です。

➤ **「知らない人」だけど、「困っている人」の場合は？**

「困っている人を見たら、助けて親切にしてください」と、教えているご家庭もあるかと思います。しかし、顔を見たことがない＝「知らない人」だと、親切をするには勇気が必要となります。

本当に困っているようだけど「知らない人」のときは、まわりに協力してもらえる大人を探すように教えましょう。

**その2：❶知らない（知らない人の車に乗らない）**

➤ **あなたの子どもさんは、大人に声をかけられると近づいていきませんか？**

警戒心が薄く人懐っこい子どもだと、声をかけられると無意識のうち近づいていく場合があります。決して悪いことではありませんが、登下校や公園などで遊んでいるときは、不用意に近づかず、すぐ逃げられる距離を置いて、話すように教えましょう。

相手が車に乗っている場合は、体重の軽い子どもでは、ほんの数秒で車に乗せられてしまいます。

➤ **知らない人から「お父さんがケガをしたから、病院まで乗せてあげてあげる」と言われたら？**

突然、そんなことを言われたら、子どもはどうしたらいいか分からなくなるでしょう。

そんな時でも「家に帰って確認します。」と、車に乗ることを断るよう教えておきましょう。

### その3：**お**おごえをだす（あぶないときは大声をさけぶ）

#### ➤ **びっくりして「大きな声」なんて出せるの？**

急に「知らない人」に腕を掴まれたりしたら、びっくりして声が出ないかもしれません。

やはり、近づかないでいつでも逃げられる距離でないと、大きな声を出すことは難しくなります。

大人でも急に大声を出すことは難しいことです。可能であれば、まわりに迷惑がかからない場所を選んだり、自宅で布団を被って極力声が漏れない工夫をしたりして、大声を出す練習を親子でやってみることをお勧めします。

#### ➤ **不審者に口をふさがれてしまったら？**

そんな時に役立つのが防犯ブザーです。防犯ブザーの使い方を、あらかじめ確認しておくことが大切です。また、電池切れやランドセルにぶつかった衝撃で、いつの間にか壊れてしまっていることもあるので、定期的に点検する習慣をつけましょう。

#### ➤ **防犯ブザーの取り付け位置が分かりません**

ランドセルの脇や、ランドセルの肩ベルトの上部に付けているのが、一般的ではないかと思います。しかし、ランドセル脇では不意の時に自分で紐を引っぱることができません。

もし不審者に背後から抱きつかれたときは、防犯ブザーを鳴らすことができるでしょうか。

背後から抱きつかれても、どうにかして防犯ブザーの紐を引っ張れる腰付近やランドセルの肩ベルト下部に付けることも考えてみましょう。



また、付ける位置に影響されますが、一般的には利き腕の反対側に付けると鳴らしやすくなります。右利きの子どもの場合であれば、左側の肩ベルトに付けると紐を引っぱりやすくなります。

### その4：**す**ぐにげる（人のいる安全なところに逃げる）

#### ➤ **どこに逃げればいい？**

逃げると言っても、車で追いかけられたら大変です。

近くにある「子ども110番連絡所」や「コンビニエンス



ストア」等の商店に、逃げ込むようにしましょう。

また、仲の良い友達の家、普段遊んでいる公園、塾や習い事など、日頃からもしものことを想定し、それぞれの場所にいるときに逃げ込める場所を、安全マップを活用してあらかじめ決めておくことも大事なことです。

### その5：**ひ**らせる（家族や学校にしらせる）

#### ➤ 日頃から親子で会話する時間をもつ

不審者に声をかけられたりした子どもは、ショックで話せなくなることもあります。生真面目な子どもの場合、自分に原因があったと考えてしまい、大人に話せないていることもありうるのです。

日頃から親子で話す機会を多く持つようにして、話しやすい関係を作ったり、何かあったら必ず親に伝えるよう教えておくことも大切です。

#### ➤ 子どもから話を聞いたら、すぐ小学校等に連絡しましょう

不審者が連続して声かけをすることも考えられますし、不審者情報があれば、パトロールをしたりすることも可能です。

子どもから不審者の話を聞いたら、すぐに小学校等に連絡をしましょう。

また、子どもから話を聞くときは、イスに座らせるなど落ち着かせて、要点を絞って話を聞くようにしましょう。

#### ＜こんなことを確認しよう＞

- ◇ いつ、どこで
- ◇ どんなことをされたか（声かけ、身体を触られた など）
- ◇ 不審者の特徴（性別、服装、車の使用の有無 など）

## ◆ **下校中の道草や帰宅後の外出時の注意点**

下校中の道草や帰宅後の外出時も注意が必要です。不審者に限らず、子どもたちだけで立入禁止の場所に入って遊ぶかもしれません。

また、梅雨時の大雨により普段は水量の少ない用水路等が、増水することも予想されます。



過去には通学路脇の用水路に子どもが落ちた事例もあります。

下校中の道草や帰宅後に外出した際は、次の点を親子で話し合い、注意しましょう。

### <注意するポイント>

- ◇ 貯水池や用水路、立入禁止となっている場所には、近寄らないように教えておく
- ◇ 立入禁止の場所でフェンス等が壊れていたり、安全上の問題を発見した場合は、施設管理者や小学校等に連絡する
- ◇ 危険な場所で子どもたちが遊んでいる時は、遠慮せずに注意する
- ◇ 大雨の後は、川や用水路等に近づかないように教えておく
- ◇ 川などで友達が溺れそうになったら、子どもだけで助けようとしないで大人の助けを呼ぶ
- ◇ 公園などで遊ぶときは、暗くなるまえに帰るように教えておく
- ◇ 道路では遊ばない

## ◆ “あいさつ”で繋ぐ地域之力

鈴川小学区の中でも住宅地が密集している地域と、住宅が点在している地区、住宅街だけど日中は共働きなどで在宅する家庭が少ない地域など様々です。家が点在している場合では、不審者に遭遇した場合に、逃げ込める場所までの距離がある場合もあります。

そこで重要になるのは、「親子でお互いのことをよく知っておく」ということと、「いざという時に、助けてもらえる顔見知りを作っておく」ことです。

### ➤ 親子でお互いのことをよく知っておく

子どもが、家庭以外ではどんな環境で過ごし、

- ◇ 学校の行き帰りに、どの道でどんな行動をとっているのか。
- ◇ 一人きりになってしまう所があるのか。
- ◇ 仲の良い子はどんな子で、どこでいつも遊んでいるのか。

などをよく知り、子どもと話をする時間を多く作り、その場所について親の目でもよく見ておくことが大切です。

➤ いざという時に助けてもらえる顔見知りを作っておく

そして「いざという時に、助けてもらえる顔見知りを作っておく」ためには、日頃から“あいさつ”をする習慣が重要になってきます。



地域のおじさんやおばさんと“あいさつ”を交わすことで、子どもにとって「顔見知り=安全な人」を増やしましょう。

いざというときに助けてもらえるほかに、子ども自身が「安全な人」と「知らない人」を区別することで、不審者対策にもなります。

家族と一緒に街をまわって、『この店のおばちゃんは、よく話をしてくれるな。』、『このおうちの人たちとは、家族ぐるみで仲良くしてるな。』など、『いざというときに頼れる人』をあらかじめ決めておくことも大切でしょう。

❖ **不審者に間違われるから、子どもに注意できない?!**

このご時世、不用意に子どもに声をかけると、不審者に間違われないかと臆病になっていませんか？

- ❖ 暗くなっているのに一人で遊んでいたりすることは、防犯上問題があります。大人として注意することは当然のことです。変な気がねの結果、子どもが事件に巻き込まれたら大変なことです。必要なときは勇気を持って注意しましょう。

# ◆◆◆ 安全マップ ◆◆◆

鈴川小学区の通学路でも、交通量の多い道路や道幅のせまい道路、見通しの悪い交差点などが多く存在します。

また、池や水路など注意が必要な場所もあるので、親子で点検をしてみるといいでしょう。

## ◆ 安全マップ（北部版）

鈴川小学校学区「安全マップ」

◆◆◆安全のやくそく◆◆◆

- 🔥 道路をわたるときは、右・左をたしかめる。
- 🔥 道路は右側を歩き、ふざけたりしないで歩く。
- 🔥 危険な場所に近づいたり、遊んだりしない。
- 🔥 自転車に乗るときは、ヘルメットをかぶる。
- 🔥 暗くなるまえに、決められた時間までに帰る。
- 🔥 知らない人に声をかけられても、ついていかない。

山のけしき

<危ない目にあわないためのやくそく>  
ついていかなぬ (知らない人についていかない)

- のらぬ (知らない人の車に乗らない)
- おおこえをだす (あふないときは大声でさけぶ)
- すぐにげる (人のいる安全なところへ逃げる)
- しらせる (家族や学校にしらせる)

～学年見守りの日～

- 第1学年…毎月 1日
- 第2学年…毎月 5日
- 第3学年…毎月 10日
- 第4学年…毎月 15日
- 第5学年…毎月 20日
- 第6学年…毎月 25日

## ◆ 安全マップ（南部版）



## ◆ 「安全マップ」を使って親子で安全点検

自分が住んでいる地域でも、知らないことが多いものです。子どもの通学路や遊び場までの経路をたどってみてください。

時間帯によって、人通りなども変わってきます。小学生が被害に遭う犯罪が起きやすい時間帯（14時～18時）に、行ってみるといいでしょう。

また、休日に親子で「安全マップ」を持って、散歩に出かけてみましょう。  
いざという時に子ども110番連絡所やコンビニなどの「逃げ込める場所」や、「危ない場所」を子どもに確認させましょう。

子どもたちが遊ぶ公園でも、安全だとは限りません。通学路も含めて危険な箇所がないか確認して遊び方や横断の仕方などを教えておきましょう。

### ＜公園＞

- ◇ 生け垣などで視界が悪く、死角になる場所がないか。

- ◇ 子どもたちが入ると、出られなくなる場所がないか。

### <通学路>

- ◇ 歩道がない場所や、見通しの悪い交差点はないか。
- ◇ 通学路脇に、水路など危ないところがないか。

昼間は安全に見える場所でも、暗くなると人通りが極端に少なくなったり、街灯が少なく非常に暗かったりする場所もあります。

もし、安全マップに載っていないポイントで、注意が必要な場所を見つけた場合は、小学校に連絡し安全マップに付箋紙などで追加しておくことも大切です。

